

01

目白通り：尾の道に美あり

（豊島区高田）



日無坂（左）と富士見坂（右）から早稲田方面を望む



宿坂（左）、のぞき坂（中）、千登世橋（右）と目白通り沿いに次々と現れる新宿方面への見通し

□尾根道から下る坂道

「都市展望の丘。展望台を設けよ。尾の道に美あり。」
—東京の戦災復興計画事業を指揮した都市計画家、石川栄耀（いしかわひであき 1893 生 - 1955 没）の言葉だ。

建物を失った焦土の東京に立って初めて、幾つもの丘陵と谷地が織り成す東京の原地形に向き合うことになったのだ。そう、東京のまちの特徴は、天恵としての地形の豊かさだ。そして、まだまだ沿道の建物も未だまばらであった尾根道からは、至るところで、遠く東京の市街地が展望されたのだろう。眺望の美は尾根道に宿っていたのだ。

神田川が掘り込んだ目白台の尾根を走る目白通りを歩けば、現在でも「尾の道に美あり」が実感される。目白通

り沿いから早稲田方面へ下る、一定間隔に存在する坂道から、思いがけない遠景が次々と目に入ってくるだろう。

斜面、そして谷地には既にマンションが立ち並び、見通しの距離は年々、縮まってきている。例えば富士見坂一つまり、かつて富士山まで届く見通しを持った坂道でも、現在では新宿の高層ビル群あたりが精々で、そこで遮られてしまう。それでもなお、高密度で窮屈な東京のまちなかでは、その眺めは何にも代え難く晴れ晴れしいのだ。東京のまちなかの眺望の第一の価値は、まさにこの点にある。

原地形が与えてくれる天然の展望台＝尾根道から下る坂道の頂き、そこからの眺めを大切にしたい。都民の眼差しが、再び遠くの富士に達することを夢見つつ。